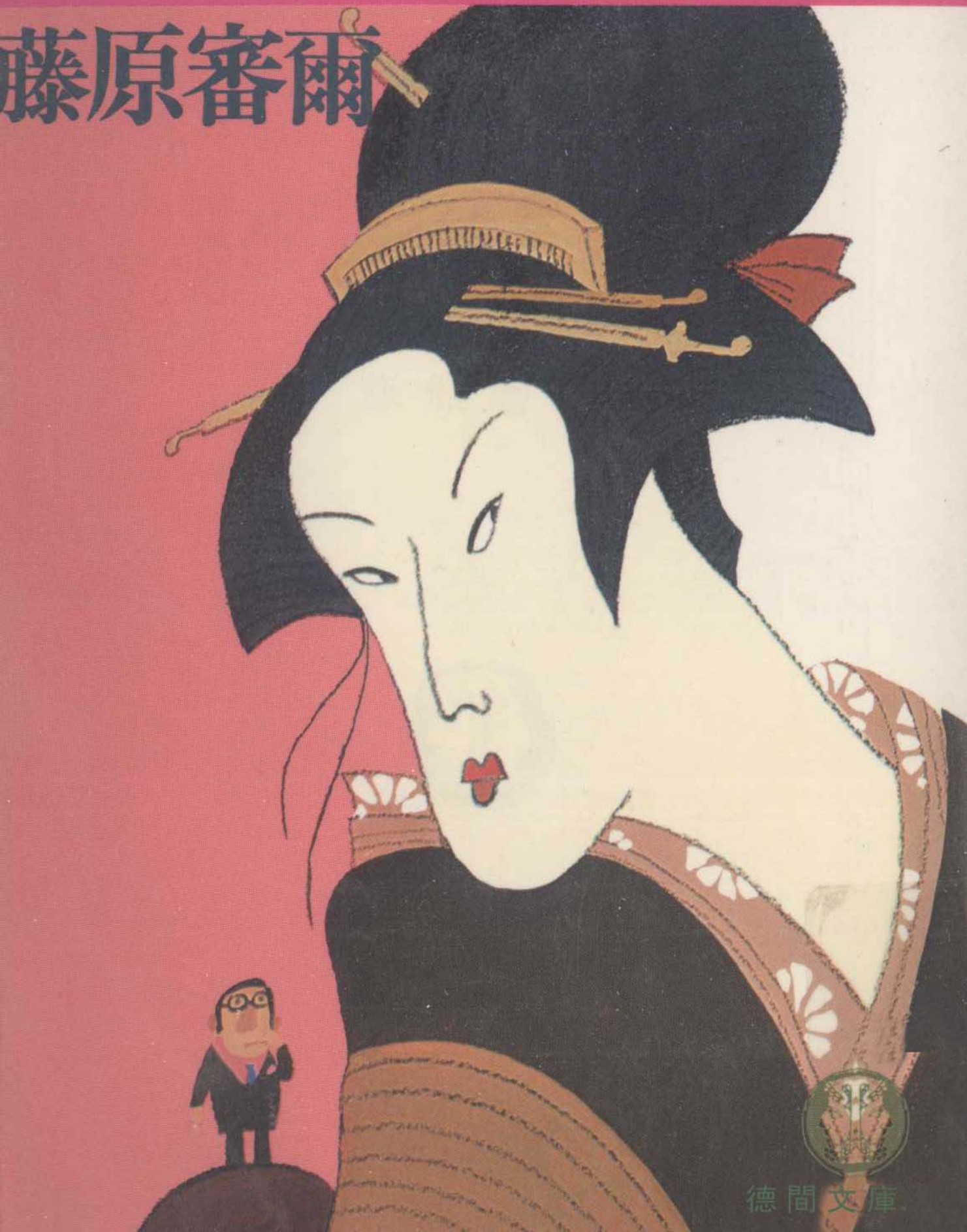
わが国おんな三割安

藤原審爾



徳間文庫

徳間文庫

わが国おんな三割安

© 1982 Shinji Fujiwara Printed in Japan

406-3

1982年2月15日　初刷

著者　藤原審爾

発行者　徳間康快

発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四―一〇　〒一〇五
電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替　東京四―四四三九二番

印刷　凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当　萩原　実〉

ISBN4-19-597279-5（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

徳間文庫

わが国おんな三割安

藤原審爾

目次

美少女ぽち　5
名器まめ子　43
あおかん星子　76
いただき初子　107
またたび笠子　136
さかまき万子　193
ちゃりんこ浮子　218
あれあれ幾代　249
ぽち、結婚しなよ　280
解説　小松伸六　309

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

美少女ぽち

竜子がはじめて吟子に会ったのは、五月半ばのことで、その時、竜子は家の近くの中華ソバ屋で、冷し中華そばの昼食をとっていた。

吟子はソバをたべている竜子の横にやってきて、鼻声で、

「おばさん」

と馴れ馴れしく話しかけてきた。

竜子は三十をとっくにすぎているし、化粧もせず、男のように頭を刈りあげているから、やわらかい女らしいところがみえない。若さや色気もない。そんな見かけだけのものに頼って、男にもたれかかったりして生きる気持は、とっくの昔になくなっている。仕事の上で、おばさんといわれようとばあさんとよばれても、そんな程度のことにこだわったりはしない。しかし心の底まで、若さや色気をうしなっているわけではない。若いぴちぴちした子に、おばさんといわれたりすると、ときにはカチンとくる。

竜子は返事をしないでぶすっとした顔をあげた。この陽気に、吟子は、冬物の厚い紺色のブルージンをはき、くたびれた赤い毛糸のセーターを着て、ガムを噛んでいた。二十そこそこだが、グラマーで、がっしりした軀をしている。顔も角ばっているが、頭の中味が足りない顔でもない。当節

の若い者は、相手の気持なんかを、てんで気にしない。吟子もそういう一人にちがいない。
竜子がぶすっとしているのに、気にもとめず、
「あたいをつかってくンない」
と言った。
竜子は新宿芸能という芸能社をやっている。それをこの先にあるセーヌという喫茶店のボーイに、吟子はきいたそうだった。
「あたいさ、ちょっと踊ってたことあるンだ」
「まあおかけなさいよ」
竜子のところには、十人くらいストリッパーがいるのだが、仕事はいくらでもとれるので、十人が十五人になってもかまわない。もういくらか軀の線が崩れているが、吟子のおっぱいは大きい。せり上ったようなかたちだから、裸になったとき見ばえがする。食指がうごいて、竜子はおだやかな顔になった。
「なにかたべない」
「カツ丼たべたい」
骨盤が盛りあがるようにはって、肢も長く、なかなかカッコがいい。もっとも難がないわけではない。美人とはいえないし、がっちりしているわりに、腰のあたりから臀部にかけてのところが、偏平で薄い感じがする。
「うちは、踊りたって、フロアショーやお座敷ショーなのよ」
「ヌードでしょ。あたい、軀には自信があるわ」

「いくつ？」
「成人式はすんでるわ」
「おうちで反対じゃない」
「九州だもん、関係ないんだァ」
吟子はだんだんおしゃべりになって、田舎で百姓をやっている家のことや、タツオという青年と一緒に東京へきたこと、タツオがつまんなくて喧嘩別れしたことなどを、ぺらぺらしゃべった。
話が調子よく出来すぎているのと、すぐ喧嘩したりするように気持が贅沢なので、竜子は間もなくこの子はうちではもたないなと思った。もっとにっちもさっちも行かなくなったような、それでいて辛抱の出来る者でなければ、ストリップなんかとてもやれない。裸になればらくに金になると思ったら、とんだ間違いで、一回に万という金をもらうためには、別の仕事がつくのである。
そういう結論が出たときには、それへ従っていれば、あとでいやな思いをしたり後悔しなくてすむ。もう七年もこの仕事をつづけていて、知りぬいているのに、竜子はそのとき魔がさしたのだった。
とどいたカツ丼を、吟子は獣みたいにがつがついっきにたべ、
「ああおいしかった」
と笑顔になった。
「昨日のお午からなにもたべていないのよ、あたい。今夜泊るとこもないの、あたい。ねえ、つかうだけでもいいからつかってよ」
輝くような笑顔と明るい声を見たり聞いたりしているうち、竜子は、

「いいわ、これから一緒にいらっしゃい」
ふっとそう言ってしまった。
それで家へ連れて帰り、着る物からはく物まで、一切そろえてやり、踊りも教え、仕事も与えてやったのだが、七月末には仕事先からその吟子はあっさりドロンしてしまった。
それもその夜のお座敷の客とレンアイして泊りにいき、客の財布の中の三十万ほどの金を持ち逃げしたのだった。

柏木にある竜子の家は、表が事務所になっており、竜子と亭主の金沢は、その奥の三部屋で暮している。二階は、身寄りもヒモもいない女たちが、二、三人でつかったり、ときには五、六人になったりする。
亭主の金沢とうさんは、竜子より二十ちかく年上で、新宿芸能の表むきの仕事のほうをやっている。出張ホステスの斡旋（あっせん）である。
その夜、三時すぎに寝床に入り、うとうとっとしたところを、竜子はしつこい電話でよび覚まされた。こんな夜中に電話をかけてきたりする馬鹿は、たいてい酔っぱらいの客である。しばらくほっておいたが、今夜の馬鹿は諦（あきら）めない。電話は事務所から切替えて、頭の上の床の間にあるので、うるさくて眠れもしない。
根負けして竜子が電話に出ると、客ではなくて、井筒という小料理屋の女将（おかみ）で、いま吟子のレンアイの客から、三十万とられたと怒ってきたというのである。
「谷本さんはうちじゃ大事なお客なんですよ、どうかしてもらわなきゃ困りますよ。責任とって下

さいよ」

井筒は二階に二部屋しかなくて、ショーのときには二つの部屋をつかうのだから、客はいつも一組で、それに月に三、四度くらいのお座敷である。そう大事な店ではないし、三十万の弁償なんかとんでもない。

竜子は、強腰になって、

「そりゃおたく様へいっている間に盗ったのなら、責任持ちますわ。でも、よそへ泊りにいってじゃ、公務ではありませんわ。お二人の自由なレンアイ中のことでしょ。そこまで責任はもてないですわ。それに、事情がなにかあったかもしれませんからね。ともかく明日の午前中に、うちの社の者を、先方へ伺わせ、よく話をきいてみますわ。このあいだも、十万円入った財布がなくなったって騒がれて、よく調べたら、風呂場へ忘れていて、それもたった三万しきゃ入ってなかったんですよ。そんなこともございますからね」

とまくしたて、いなしてしまった。

吟子と一緒に井筒へ出かけていった村枝が二階で寝泊りしている。竜子は金沢とうさんをおこして、二人で村枝をよんで今夜の様子を一応たずねてみた。

「やるねえ、あの子。踊る前に一杯のめっていわれて、のんでたとき、連れのお客さんが二人きたのよ。その時、お金の入った封筒をあの社長さんに渡したわ。このくらいの厚さだったから、四、五十万あるとあたしは思ったンだ。そうねえ、そういえば、あの子、急にハッスルしたわよね。踊りだして、社長さんに抱きついたりしてたわ。ねらってたのよ、あの時から。あたしなんか、ぶるっちゃって、出来ないけどね、たいしたもんよね」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

聞いているうち竜子は、かっと頭に血がのぼってきた。井筒の女将のようにがんがんやられると、なんとなく吟子をかばうような気持が湧くが、村枝みたいにさも羨ましそうに言われると、かえって疑いをはさむ余地さえなくなり、まんまと吟子にしてやられたような気持がし、むやみに腹が立ってきた。丸一日なにもたべていないような、その日、寝るところもないような、ひどい苦境から救ってやり、なにからなにまで用立ててやり、まだその金だって二万少々残っている。なにも恩を売る気はないが、恩を仇で返さなくてもよいだろう。

あくる朝、まだかっかしながら竜子は、こういう時には弁護士より安くて便利な、大曽根組の園田という男に、井筒と谷本のところへいってもらった。

「そんなのを一文も払うこたァねえよ」

園田は出かけていったのに、午後になって戻ってくると、まるで調子がちがった。

「井筒の女将はよく出来た人だ、災難だと思って、三方損にして、十万ずつ出しましょうというんだ。社長にも会ったが、社長のほうも、金のこたァ問題にしてねえよ。笑ってたよ。弁償しろと言えばよ、ごねも出来るがよ、こうきれいに出られたンじゃ、どうしようもねえよな。それとよ、井筒の女将は、ここの得意先を知ってるぜ。そっちへなんだかんだいわれちゃまずいだろ。たれこまれちゃおしめえだもんな」

それはその通りだし、園田の顔も立てなければならない。しぶしぶ、ほんとうにしぶしぶ竜子は、十万円だした。それで吟子への憎さが二百倍になった。

一日、もう一日、じっと我慢をしていたが、三日目になるとどんなことをしても吟子をとっちめてやりたくなり、我慢しきれなくなった。竜子は、そういう思いつめるたちなのであって、子供の

時はそれでぐれてズベ公になり、二十代は男狂いをたてつづけにし、とうとうこんな稼業に堕ちたのである。そんな自分を百も承知しているのに、とうとう新宿署へ出かけていった。危ない綱渡りだが、なんといっても、タダで吟子をさがしてくれるのは、広い世間で警察だけである。

出かけた竜子は、むろんすっとぼけて、

「三日前から帰って来ないんですよ、殺されたんじゃないかと思って」

と訴えた。セミヌードの写真をみせると、徳田という初老の刑事は、吟子をちゃんと知っていた。手配写真をみせて、

「横浜でね、メモリーというバーに勤めとって、去年のクリスマスに、客と泊りにいってだ、五十二万円盗って逃げたンだ」

生れは札幌で、親は習字の先生だそうだった。

あきれて竜子は、ぽかんとなった。

恩もくそもない、はじめから竜子は小娘にかるく騙されていただけなのである。

吟子が大阪の北野の小屋で踊っているというのを、竜子がきいたのは、その後、一ト月半ばかり経った九月はじめのことだった。

その一ト月半ばかりの間に、谷本さんが金を受けとってくれないからと、井筒の女将から十万円を返してもらったので、吟子のことを竜子はもう忘れかけていた。

しかしその話をきいたとたん、竜子は、じっとしていられなくなった。会って一発ぶっ叩いて、それから蹴飛ばしてやりたいのである。

「そううるさくちゃ、こっちがつとまらんよ。吟子ンとこへ行って、殴るなり蹴るなりしてきな」
金沢にもすっかりあきれられたほどだが、それをよいことに、竜子はどうにも腹の虫がおさまらなくて、数日後、とうとう大阪へ出かけていった。
親身になって面倒をみてやったのにそれを仇で返されて腹が立つのは、根が親切だからでもあるが、無理をして親切を売ったからでもある。竜子はなかなか自尊心がつよく、そのせいで追従も愛想もいえなくて、まともな生活から追いだされてしまったものだが、その自尊心のおかげで、破滅するほど堕ちはしなかった。謂ってみれば、今度の吟子の件での癇癪は、枕探し専門の女をまるで見抜けなかったことが、実はいちばん頭にきているのである。
はじめは決闘に行くような気だったから、着る物もスラックスの軽装でサングラスなどかけ、武器がわりに太い鎖のついたペンダントを胸に吊し、思いつめた気持で新幹線に乗ったのだが、どういうわけか、横浜をすぎるともう、気力がすうっと抜けてしまった。こんな馬鹿な金をつかっている自分にいや気がさしてきた。
大阪の北野のはずれにある、いま吟子の出ている小屋は、大森組という暴力団がやっているもので、ストリップ小屋としては最低のものなんだ。いつか園田に頼まれて、葉子という子が〝大森興行〟へ手伝いにいったが、中途で逃げてもどったことがある。待遇がおそろしくわるくて辛抱出来なかったものだった。
そんなつまらない小屋に出ているというのだから、吟子は、悪い男がついているのかもしれない。吟子を一つぶっ叩いて、男のほうにぶっ飛ばされてはかなわない。
竜子はだんだん心細くもなってきた。

大阪についたのは、朝の十時すぎで、まず帰りの切符を買ってから、竜子は北野の小屋にむかった。せめて借金の二万円だけでもとりかえしてやらないと、さまにならない。

みゆき座というその小屋は、場末も場末、街はずれの家並みがきれた先の路ぞいにあった。ガソリンスタンドが真ン中にあって、その右側がドライブイン、左側にみゆき座というようになっていた。多分三つとも大森組が営っているにちがいない。

竜子はタクシーをみゆき座の前でおり、けばけばしくえげつない看板の間から、小屋をのぞいたが人影もない。横の舗装してある路へ出て、裏にまわろうとすると、そこにはまだ新しい敷地二百坪ほどの高い塀に囲まれた屋敷があった。ストリップ小屋の隣に家を建てるとは、ずいぶん酔狂だし、これが大阪風なのかもしれない。そんなことを思いながら、なに気なく表札をみると、

大森

とかいてある。

門の奥で掃除をしている年配の男の腕に、刺青がみえる。どうやら組長の別宅らしい。竜子は、そのごま塩頭の万年三下みたいな、貧相な男に、女たちは小屋に宿泊りしてるのかときいてみた。男は、背のほうを指して、

「裏に、寮があるンや」

いったいなに者だろうという、けげんそうなあまり利口とはいえない顔で、竜子をじっと見た。

竜子はそれでその家の裏手のほうへまわった。しかしそこにあるのは、黒い古ぼけた百坪くらいもありそうな倉庫だけで、寮らしいものはなかった。もう一つ裏かもしれないと思って、倉庫の裏へまわったが、そこはもう田ン圃である。

寮というのはその倉庫のことらしい。

竜子は、倉庫と屋敷の塀との間の、いまにも崩れ落ちそうな屋根のある大きな花崗岩の井戸へ近づいた。井戸のむこうに倉庫の入口と屋敷の裏門とがむき合って見えている。

倉庫の入口から竜子は、なかをのぞいたが暗くてなにもみえやしない。九月末なのに、その日はかんかん照りで、汗がたらたら流れるような天気である。明るい表に馴れたせいで目がみえないのだ。

竜子はサングラスをとって倉庫の中へ一ト足入って、ごめん下さいと声をかけたが、返事がない。しかしどこからかラジオの流行歌が聞えてくる。どうやら頭の上のほうからである。

そのうちいくらか目が馴れ、倉庫の中の様子がみえだした。右にも左にも、椅子やボックスや舞台背景の道具らしいものが、ぎっしり積み重ねてある。真ン中より右よりのところに大きな梯子のような階段があるのに気がついた。その階段を昇りきったところに、明りとりの窓もみえた。そこから右のところに二階があって、つまり寮になっているのだろう。

竜子は、もう一度ごめん下さいと声をかけてその階段の下までやってきた。ラジオはその二階から聞えているし、階段の下にはサンダルやなんかの履物がちらかっている。

ちょうどその時、いつの間に出てきたのか、白いショートパンツの若い女の子が、階段の上から下りてきた。薄い紗のようなシャツをきて、袖はまくりあげ、裾は腰のところでぎゅっと締めて結んでいる。ちょいとしたズベ公みたいな恰好だが、ズベ公とちがい、一種の気品のようなものがある。階段のおりかたにしてもがさつなところがない。それに、ぞっとするほど綺麗な少女なのだった。竜子は、大森の別宅のほうの娘だなと思った。

めずらしく竜子は、馴れ馴れしく笑いかけながら、その子に声をかけた。
「ねえ、吟子さん居る？」
薄いシャツの下にきちんとブラジャーをしているのがみえ、清潔なものがそこからただよってきた。
十五、六のその少女は、少しも人見知りせずに、じっとまっすぐに竜子をみて、
「居ないわ」
ときれいな声で答えた。
「いつ頃、帰ってくるの？」
「さあ、わかんない」
「待っててていいかしら、上で」
「どうぞ」
それで少女は土間へおり、サンダルをつっかけて出ていった。竜子は入れちがいに階段をのぼっていった。ふいにがらがらっという大きな音がうしろから聞え、階段の中途で竜子は振りかえった。そこだけ明るい戸口の外の井戸端で、少女は釣瓶（つるべ）をひきあげていた。上半身くらいもある大きな四角な釣瓶があがってくると、それを井戸の花崗岩の縁の上にのせ、厚くてぬるぬるしたその釣瓶へかじりつくようにして、うって変って獣みたいにごくごく口づけで水をのみだした。なにもそんな水を飲まなくったって、家へ帰れば、気のきいた飲物があるだろうに、あの子はそれが我慢出来ないンだ。やっぱり暴力団の娘だなと思った。
二階の半畳ほどの踊り場には、下駄箱が一つおいてあった。その踊り場で、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com